PERSONALITY 研究に於ける "SYMBOL" の問題

大阪學藝大學

原 谷 達 夫

PROBLEM OF "SYMBOL" IN THE STUDY
OF PERSONALITY

Osaka Teachers College

BY HARATANI, TATSUO

Personality の研究は社會心理學の進歩に伴つて廣い見透しを獲るであろう。(18) 1946年, American Psychological Association に, Personality and Social Psychology の Department が設立されたことは, この間の事情を有力に語る. その初代 President として Allport, G. W. が行つた演説 (3) には, 社會的視野を強調するあまり, 觀念論者まがいの極端な口吻が見えるところを割引きするにせよ, Personality の研究方向に前進路を拓こうとする意圖が端的に示されている. 本研究の出發點となつた. Symbol についての彼の示唆は無駄であるまい.

偶々 Psychological Manograph の 64 卷に Symbol Elaboration Test の實驗が Krout, J. (15) によつて發表されたのであるが, その構想が, 上の Allport の演説に年を同じくして始められているにかゝらず, Symbol についての考え方は, 極めて臨床的であり, Allport の主張とは關係がないものに見える. このことは私にとって Personality 研究の立場における一つの手がかりとして, Symbol に對する考察を動機づける媒介となつた

I

性格の臨床的研究に興味をもつ者にとつては, Krout^t の S. E. T. は Rorschach Test や T. A. T. 或いは今後我が國にも用いられるであろう. H-T-P (7) などと並んで, 一つの代表的な投影診斷法であることを認めねばならない. 且, これらの投影操作の前提には, Universal Symbolism があるということも Krout が指摘するところであろう. しばらく彼の論旨をかりて, かゝる Symbolism について考えておきたい.

臨床的 Symbolism の元祖は Freud, S (6) である. 患者のもつ trauma が, 發作症狀や夢の上に象徴されることは明かにされた. だから逆に, 何らかの象徴 Symbol を, 刺戟として與え, その反應を診斷すれば, そこには Symbol 自體による普遍的な人間經驗と, 被診斷者それぞれに特有な經驗とが織交つてあらわれる.

故に反應を導き出すところの Symbol の刺戟價值が臨床技法上での大切な問題となる.

たとえば S. E. T. にあつては, 刺戟として擇ばれた 11枚の Symbol 圖形は, それぞれ簡単な線や, 點の集りであつて, このような圖形を用いて Vpn. が何か繪を書き上げるのだが, 繪の内容は, Vp. 各自によつて種々の差異を伴うとしても, 用いられた Symbol そのものは, “第一圖の半圓は女 (母性) を普遍的に象徴しうる” というような假定が存在する. 一見墨繪判斷にも似た奇異の感を受けないでもないが, それを實證することにテスト標準化に伴う妥當性検討の努力が注がれる.

ともあれ Krout で注意すべきは, Symbol の刺戟性を論ずるにおいて, Morris, C. (19) が, 20年前に與えた定義を持出している點である. 同じ Morris の手になる近著 (20) の一節が Allport の演説にも援用されるのは單なる偶然であろうか?

Morris は, Symbol を Sign の中に含めて具象的な Signal と區別している. 即ち言語のように, 解釋者に於いてもとの刺戟表象をば別の Sign に置きかえて同義の刺戟としての役割を果しうるところの代用 Sign を Symbol とよぶ. 彼にあつては, Semiotic は Signs の科學に他ならない. こうして Morris は Sign 必ずしも Means-objects とはならないことを指摘しながらも Tolman の功績を高く評價するとともに (24) Hull を中心とする新行動主義 (12) が, Symbol という語は避けながら, よくその本質を理論的に捉えているとして今後の發展に期待する.

ところで, Allport は, Morris が人に於ける Symbol の豊富な生産を説き, その社會的 Communication の機能論じているにかゝらず, 猶論旨の重味を自然科學的領域にかけすぎるとする印象を述べる. 彼は Morris の考え方を何か鹵莽く思つているようである.

Morris が “科學に於ける諸モデル使用についての危険の一つは, たとえば理説を説明するところの諸性質 Properties を, それが理説自體には含まれていない

ころの諸性質であるのに、理説の主體 subject matter にそのまゝ歸せしめるといつた誘惑から生まれる”と警告的に述べている一節 (20. P. 23) は、Allport では逆用され Symbol というものは、このように性質の擴張によつて發展させられるのであるから到底行動主義本來の立場のみで説明することは複雑な人間社會において不可能であるとの主張に轉ぜられる。

たしかに Morris は用心深いけれども、Symbol の社會的役割について充分な見透しを與え、最後にも、“Semiotic を遠慮なく實社會に應用することから、科學としての Semiotic が生長し、個人的社會的健康のために強い役割を果たすであろう”と希つている (20 P. 244) のであるから、むしろ Allport の言分の方が無理にきこえるかもしれない。

然し、結局 Symbol の社會的機能に關する兩者の違いは程度問題であると見た場合、既に 15 年も昔に Personality をば力動體制なりとして有名な定義を與えた Allport であればこそ (2. P. 48) より強力にそれを説かざるをえないと云うふうを考えてみると、先に述べた Krout のような臨床的取扱いに於いて單純に刺激性としての枠を Symbol に設定することは再考されねばならない。

個體の知覺に投影される Symbol の役割は、精神分析學本來の立場からして、個體發生的見地によつて考察される傾向が著しい。尤も、個體發生とはいつても、乳幼児期という枠さえ考慮に入れるならば、却つて分析學には社會的影響という考え方が明示されていることに氣付く。未分化な乳幼児の精神構造にとつては、社會の複雑な刺激が漠然とした形態で伝えられるより仕方がない。それが家族環境殊に母親を通じて齎されるという解釋は當然である。或いは個體が、やゝ長じて後のエディプス・コンプレックスとか Super Ego の概念に Freud 體系の無理を認めるにせよ、後年に於ける“場の心理學”が要求體系としての Personality を取上げ (16) 行動を人と環境の函數として解明するに至つたのは、理論的に必然の展開であつたろう。

多くの投影診斷法によつて分析される内容も、實際上乳幼児期に溯つての trauma を全面的に明かにすることは困難であり、もつと生長した後年にあつて患者が蒙つた心理的刺激を探り出すのである。診斷結果に基く治療法たる catharsis も、そう容易に可能なものではなく Group Therapy にみられるように (22) 患者の行動場面を再構成することによつて効果を狙う。

こうして個々の刺激を連合的、斷片的に問題とするよりも、全體的力動的な場における行動から飽和現象や中斷行動、或いは要求水準の法則性を明かにすることによつて性格の構造が求められるに至つた。Rigidity の概念などは (8, 17) 著しい收獲として今後の進展を俟たねばならない。Lippit, R. 等による Social Climate の實驗 (25) とか 阿部氏の補填緊張法による試み (1) などは

Personality 研究に對する有力な手がかりを與えている。そこでは Symbol の刺激價値を明確に切離して考察することはむしろ不要であるに止まらず、極端に云えば却つてそのような刺激が Personality の解明に何程の効用を手がかりとして有ちうるか、という疑問すら出されているように思われる。全體的力動的な微妙な變化をつくり出す場の諸要素は、かりに一つの刺激 Symbol を取出すことを許すとしても、もはや嚴密な意味に於ける恒常的反應を産み出すことを不可能にするであろう。むしろ場そのものの影響による反應行動において Personality の本質が露呈されるのではないかと。

これは心理學に一時期を畫したほど鋭い疑問である。少くとも投影診斷法に於ける Symbol 提示の方法・場面に嚴しい反省を促した問題である。けれども刺激内容の實質を否定し去ることは、物理的空間を度外視しえないのと同様、いかに操作が進んでも不可能なことがらである。刺激内容そのものは構想を深め分析を加えられねばならない。

そのような刺激内容こそ、人間社會の産み出す刺激内容こそ、もつと研究されねばならない。舊來の機械的な反射刺激でもなければ、單純な連合的刺激でもない、もつと高度の刺激 Symbol、人間の文明の社會がつくり出した Symbol を求めよう。

Allport が述べようとした本意は、このようなところにあるのではないだろうか。尤も、彼が演説の終の方で示唆的にと遠慮氣味にあげているものは、イデオロギーが個々人に及ぼすはたらきとか、自尊心の問題、或いは世論調査による社會目標の方向といつた程度で、何ら系統だつた方法も見透しも無い。それどころか、餘りに平凡な結論にすぎないとすれば、結局何を云つていなのだろう？ という失望を感じさせるくらいではあるが。

II

だが私はかねがねこの點に關心を抱く一人として勇氣を出して意見を述べてみよう。場の心理學について述べたとおり、複雑な社會的場にあつて何らか特別の刺激 Symbol を提示してそれから Personality を全面的に抱えるなどという構想は恐らく不可能に近い。Personality に於ける文化的諸要素の影響を重視するフロイド左派の人達にあつて、普遍的 Symbolism などは認められないとしている事情 (11) は顧みられてよいだろう。けれども少くとも社會的構成における何らかの實質的刺激について積極的に探究しようとする努力は、この人達によつて最も熱心にかたむけられている (9)。ところでそのための研究方法を具體的に展開しようという段になると、それは社會的態度の尺度や集團内關係の調査を取扱う結果となり、整理に際しての統計技術が主な對象に變つてしまうかのである。(24) 云換えれば、これは社會心理學の領域なのだ。たとえば 5 年間の繼續研究を行つた Newcomb (21) から一つの代表的資料を參考

としてとつてみよう。

彼は New Deal として象徴された時代の社會變化に對應する Personality を問題の出發とし、政治經濟的態度 (P. E. P.) の尺度を用いて年毎の變化を一般傾向の上で Vpn. 群に求めるとともに、代表人物法 (Guess Who Rating scale) により、幾人かの Vpn. を擇んで面接記録を作成するという極めて尋常な手續を辿る。そしてかゝる勞作の結果として、猶次のような斷り書きに近い文章を附せざるをえないのである。

“一つの家族といったものよりも遙に複雑な環境にあつて、個々人が、即ち環境の多様な枠によつて Personalities を決定されることの個々の人が、意義の類似を以て二三の性格區劃に配列されるようなことが如何にして可能たりえよう？……著者は Personality の重要な側面が除外視されたことを嘆くよりは、むしろ社會について、その成員を分類に押しやろうとするものが何であるかを問おう (21. P. 166)。

“社會的態度と性格特性の間をとりもつのが社會の役割であり、そこには社會的態度の決定という點で、性格類型の一定數を結果するという限界がある” (21. P. 169)。

多くの統計調査に共通する事態として、こゝでも法則的な洞察が Personality に加えられているのではなく、一般的傾向が“社會的態度の變化”として述べられる。そして私達が注意すべき點は、かゝる傾向の中に、漠然とした分類が行われ、而もその分類の根據にこそ Personality の本質的領域が前提されてくるのではないか？という問題である。即ち基本的遺傳的側面こそ Personality 本來の研究對象なのだとする出發點への舞戻りが行われうる可能性である。そしてこの舞戻りに甘んずる限り、社會的刺戟を實質的に考察することなどは Personality 研究にとつて一つの附加的領域、乃至は場理論の應用にすぎないであろう。

ところで I に於いて Symbol の刺戟性を論じた際に、我々が當然氣づいたことは、個々の Vp. にとつて、刺戟 Symbol の意味が明瞭に把握されない場合にも、意識下 Subliminal の反應が結果として導き出されるということであつた。この問題は社會構造のもたらす刺戟 Symbol にも當然あてはまるべきである。にもかゝらず、質問紙法や態度調査のスケールにあつては、施行手續に内觀が介在することによつて、屢々 Vpn. の表面意識のみが取上げられる。この限界にあつては、社會的行動の枠を實質的に擴げようとしても“場理論の應用に過ぎない”との程度の收獲に止まるのは、必然の結果ではないだろうか。

個々の人にとつて、自己の Personality をつくりあげているところの社會的生活の背景構造が充分自覺されることは、むしろ稀であろう。たとえば、自己の置かれた身分 Status (5) については鋭敏な意識をもつ者でも、その身分の枠を決定しているところの階層社會

Hierarchy (14) に關しては、甚だ乏しい洞察しか有しないといった場合、當人の意識には浮ばないところの、かゝる社會的背景構造の影響を明かにすることは Personality の問題として考察に値しないだらうか。

嘗つて“階級心理”というテーマで、社會性の微視的把握に關する考察を狙つた際に私が述べたごとく (10) Molar な社會的行動は Molecular な心理機能の世界において、必ず微妙な痕跡を印しているに違いない。社會構造が分析的に研究を進めらるゝならば、これは個々人の社會性を明かにする手がかりとなるべきである。

もとより次のような批判も出るであろう。

“それは心理學プロパーの仕事ではない。むしろ社會科學の領域だ”と。

だが、Personality に於ける發生學的領域の研究に、生物學・生理學・遺傳學・或いは人類學との提携が不可分であるように、隣接社會科學の諸領域との提携、積極的な用語の驅使を今更云爲する必要は無いのである。

あらためて、この貧しい考察の出發となつた Allport を顧みると、彼が示唆した Symbol の積極的研究という語調に、たとえば“宣傳現象”のような表面意識層がとかく對象として浮上りうるのであるが、(4) それのみでは Personality 研究に及ぼす影響は皮相的に止まると思う。といつて、研究方法の困難よりすれば、個人の意識を超えたところの大きな社會構造の、Personality に及ぼす影響を捉えることは決して並大抵ではないであろうし、そのような對象は、もはや Symbol と呼ばれる要はないかもしれない。ともあれ、逆説的な結果ではあるが、かゝる領域は Personality の研究には缺くことのできないものである。

文 献

- (1) 阿部孫四郎：性格調査法 ミネルヴァ書房 1949
- (2) Allport, G. W. : Personality. New York Henry Holt 1937
- (3) Allports, G.W. : Scientific Models and Human Morals. *Psychol. Rev.* 1947, 4
- (4) Allport, G. W. & Postman, L. : The Psychology of Rumor. New York. Henry Holt 1947
- (5) Bossard, J. : The Sociology of child Development. New York. Harper & Brothers 1948
- (6) Brill, A. A. (Ed) : The Basic Writings of Sigmund Freud. Book II. The Interpretation of Dreams. New York. Random House 1938
- (7) Buck, J. N. : The H-T-P Technique Quantitative and Qualitative Scoring Manual. *J. clinic. Psychol.* 1948, 4 1949, 1.
- (8) Fisher, S. : Patterns of Personality Rigidity and some of their determinants *Psychol. Monogr.* 1950, 1.
- (9) Fromm, E. : Escape from Freedom. New

- York. Farrar & Rinehart 1941
- (10) 原谷達夫：階級心理——社會性の微視的把握に於いて——第 13 回日本心理學會研究發表 1949
- (11) Horney, K. : New Ways in Psychoanalysis. New York, Norton. 1939
- (12) Hull, C. L. : Knowledge and Purpose as Habit Mechanisms. *Psychol Rev.* 1930
- (13) Hull, C. L. : Principles of Behavior. New York D. Appleton-Century Co. 1943
- (14) 川島武宣：立身出世 展望. 1951, 9
- (15) Krout, J. : Symbol Elaboration Test. *Psychol Monogr.* 1950, 4
- (16) Lewin, K. : A dynamic Theory of Personlity New York, McGrow Hill 1935
- (17) 三浦 武：人の構造に於ける「硬さ」について 心理學研究 1950 XX-2
- (18) 南 博：社會心理學 光文社 1949
- (19) Morris, C. : The Concept of the Symbol. *J. Philos.* 1927
- (20) " : Signs, Language, and Behavior. New York. Prentice Hall 1946
- (21) Newcomb. T. M. : Personality and Social Change. New York. Dryden Press 1943
- (22) Slavson, S.R. : An Introduction to Group Therapy. New york. Commonwealth Fnnd 1943
- (23) Tolman, E. C. : Purposive Behavror in Animals and Men. New York. The Century Co. 1932
- (24) Wilson, N. : Group Position and Attitude toward Authority. *J. Soc. Psycho.* 1950, 3
- (25) Withall, J. : The Development of a Technique for the Measurement of Social Emotional Climate in Classrooms. *J. Exp. Educat.* 1948.
(1951 年 10 月 30 日受付)